

みるみる がたる

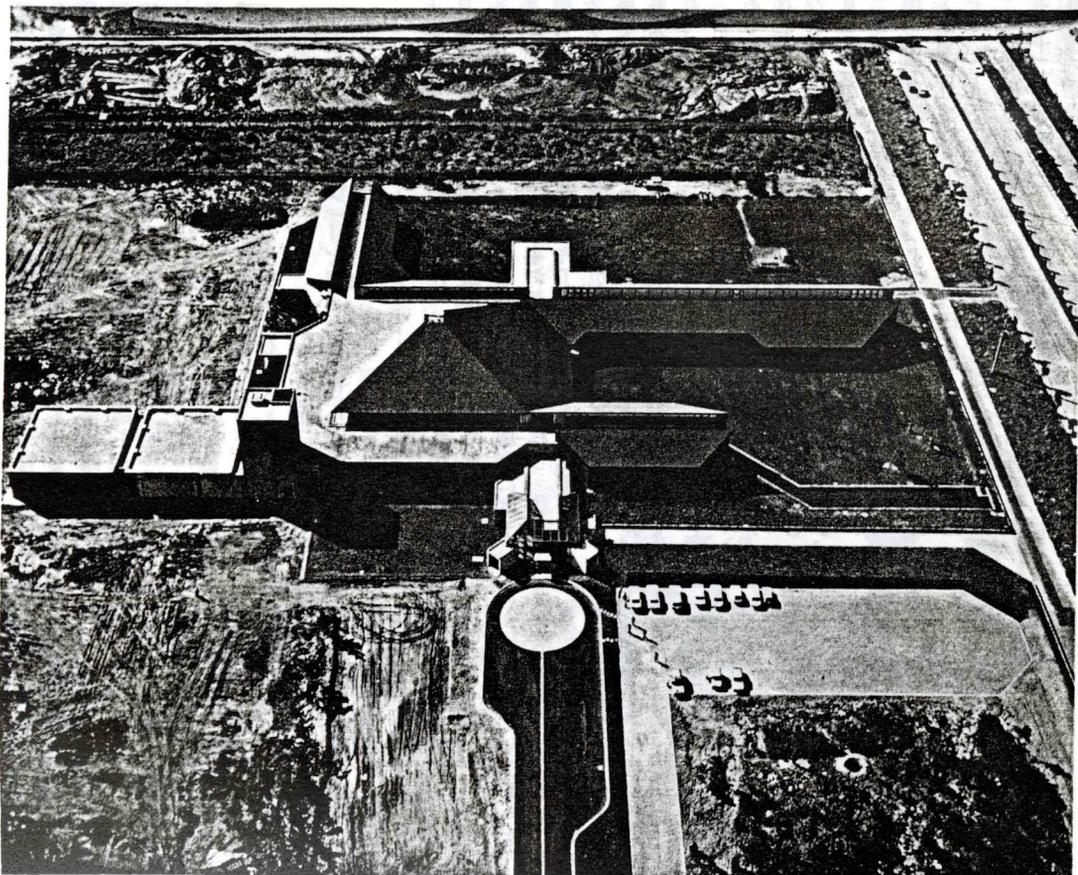
千葉県立美術館報

VOL.1 NO2

昭和50年3月1日発行
編集・発行人 松戸 節三

〒280

千葉市中央港1丁目10番1号
電話0472(千葉)42-8311(代表)



美術館展示棟全景

(撮影 沢本忠則)

その後の美術館

館長 松戸 節三

昨年四月一日、千葉県立美術館が機関設置されて以来諸準備を整え、十月二十三日の開館式、翌二十四日より開館記念として、第二十六回千葉県美術展覧会を開催し、一般に公開されました。

美術館の建設には幾多の屈折がございましたが、県民の皆様はじめ関係者各位の絶大なご支援によって開館できましたことに對し、心から御礼申し上げる次第です。

こうして昭和四十九年の県政十大ニュースの第四位に美術館の開館が入ったことは、いかに美術館の設置が切に望まれていたかを如実に物語るものとして、喜びにたえませ

ん。 県展の後、高等学校芸術展 勤労者美術展、平常展「近代房総の美術家たち」、さらに特別展「描かれた房総」を開催し、既に四ヶ月有余で三万五千人を越える入館者を迎えております。これも美術

館に對する期待の大きさをあらわすものとして、責任の重大さを痛感する次第であります。

一月十八日より、本館の第一回目の企画であります、開館記念特別展、美術と房総一〇〇年「描かれた房総」を開催できたのも皆様方の応援によるものであります。千葉県をめざす風格ある郷土づくりの一翼をになうべく、館員一同さらに一層の努力を重ねて行く所存でございます。

しかし、日本全体を覆う不況の波は、千葉県においてもさけることができず、本館の中核をになうべき第二期工事の管理棟、教育棟の建設が遅れていますことは、遺憾なことであり、今後に残された課題であります。幸い管理棟につきましては、友納知事をはじめ、県議会の英断によってこの二月より建設が決定しましたことは、まことに喜ばしいことであります。

一方本館の利用につきましては、館独自の企画展に限らず各種団体のユニークな展覧会が益々増加の一途を辿っています。館がめざす「みる・

かたる・つくる」の目標に次に近づきつつ、あります。どうか今後の美術館の発展に心暖まるご援助をお願いしたいと思っております。

第二期工事予算議決される

——経過と見通し——

第一期工事の展示棟は、四十七年九月に着工し、四十九年三月に完成した。

四十九年四月より館長以下十四名の職員により開館準備に當り、去る十月二十三日開館記念式典を翌二十四日より開館記念県展を皮切りに一般に公開されている。

しかし、第一期工事は展示棟のみであり本館の特色である教育普及活動のための教育棟と作品の収蔵保管や事務室等を含む管理棟もない状態であるので、第二期工事の管理棟、教育棟の早期建設が各方面より強く要望されているところであった。

幸い県・議会関係者の御理解により去る十二月県議会において、管理棟の建設が認め

られ、五億円の債務負担行為が議決された。一月末には入札を終り、二月県議会には工事の契約議案を上程し、議会終了後の三月末には管理棟工事が着工される運びとなっている。工期は約一ヶ年で五十年度中には完成する見込みである。

教育棟についても、五十年年度当初予算に一千三百万円の実設計料と約三億七千万円の工事費を要求中であり、管理棟と併行して工事を施工し、出来れば管理棟と同じく五十年度中に完成させたい。

いづれにしても全館を完成させ一日も早く本来の美術館の活動が出来るよう努力したいと思つので、皆様方の一層の御支援と御協力をお願いする次第である。

観潮台

ことしの美術館の課題に、友の会の組織化がある。開館早々に多くの来館者から友の会への期待が寄せられていたからである。

県民主体の大衆的な美術館に育てるには、前提として、美術と作品を理解し愛好する有志の結束が望ましく、また、大きな源動力となり、真に大衆的な「みる・かたる・つくる」美の広場が期待できると思う。

すでに、個人年会費年額千二百円ぐらいで、講座や講習会を開設し、館内外の美術見学会をやり、館と会員の連絡のための会報発行などをという意見も出ています。

気楽な友の会とはいえず、組織化し活動するには、会員の主体的な参画が不可欠だが、この点は大きな問題ではなさそうなもので、一日でも早く、有志と館の間で結成準備会を開き発足したいものである。

こうして、着実に心の糧の宝庫が、楽しい雰囲気のおかげで、これからの生活の拠点となり、普及拡大すればと期している。

(高橋 在久)

美術館に期待する

田中 たまき

東京湾の潮の香りが漂う千葉市中央港の一角に、このように素晴らしい県立美術館が開館の運びとなったことを県民の一人として心からお喜び申し上げます。これまでも千葉県文化会館をはじめいくつもの文化施設がつけられてお

りますが、千葉県内では初めての県立美術館の完成は、きっと県民文化の向上に大きな力になるものと期待しております。このような場で私事に触れることはどうかと存じますが、私自身千葉の地に生活してい

るものとして、千葉の市民文化の向上発展をつね日頃から願ってまいりました。千葉市で生れ育った夫も同じ考えで二年前県文化会館と千葉城を見上げる場所に私ども夫婦の計画に共鳴してくれた友人たちの協力も得てささやかながら市民文化にお役に立つことを願いつつ小さなサロンを作りました。年令をとわずお店にきていただければ、いい語り合い、美術愛好者に開放した壁面の絵画を楽しみ、そしてクラシックからポピュラー音楽まで気軽に楽しみ、お

客様自身で即興演奏もしていただける気のおけないサロンという程のつもりで開いた風変わりなお店でございます。幸いシロウト経営が曲りなりにも続けてこられたのも、考えてみますと私達の努力というよりは、千葉に市民文化を生み育て、花開かせたいというお客様たちの強い夢と願いに支えられたからだと理解しております。

私事を長々と書いてまいりましたが、ささやかな私の経験を通して見ましても千葉に住む県民市民がいかに文化的なものを求め、その向上発展を願っているかの証拠だということをお知らせいたします。そして今私の小さなサロンとは比べものにならない立派な県立美術館の開館を迎えることができ、これからの県民文化向上にはかり知れない力を発揮されるであろうことを期待し胸ふくらませている次第でございます。(フォーークアートサロン専務)

《美の根》

矢立て

杉本 北柿

「矢立て」とは、本来武人が矢を挿して背負った容器即籠(えびら)などの謂なのだ。その裡に、陣中世話の必要上、携帯用の硯箱を同居させた所から、その硯箱を矢立てと呼ぶようになり、三転して、筆筒と墨壺とを組合せたポータブル筆記用具を、矢立てと称するに至った。即矢立ては、武



士軍人の陣中に、文人墨客の行旅に、三河屋越後屋の御用聞に必携欠かず可らざるの具とはなった。「奥の細道」の千住のくだりに「行春や鳥啼魚の目は泪—是を矢立ての初として

行道なをす、まず、人々は途中に立ならびて、後かけのみゆる迄はと見送るなるべし」とある。

落語講談に、一席お伺い申上げて曰く「元日や矢立て扇にさし替へる」と。こ

美術館に思う

鈴木康文

本県美術界は、巨匠を持つ点に於て、群秀朋をなす面に於て、夙に矚目されてきたが、美術の中心となる殿堂を有さなかつた。県立美術館がほしいとは、文化にいっきほう県民の期せずして一致する声であつた。実にこの機を逸せず県当局が、眼をみはる創造をもつ設備と科学的革新性を盛り込

んだ美術館を建立したのは誠に時務を識る卓見である。与謝野晶子が「劫初より作り営む殿堂にわれも黄金の釘一つ打つ」と詠んだ芸術の業績黄金には遠く及ばぬとしてもしろがねでもよい、あかがねでもよい。一生の悲願ひとつに精進を続けて行きたいと思ふ。

(歌人)



久遠の天光

―藤野議長逝く―

体の結成や発展のための活動だった。日本彫塑会をはじめ県美術会、市川交響楽団などの組織化に努力し、後進の指導育成に情熱を傾注して、芸術文化の振興と大衆化に献身した。

また、県立美術館の建設促進には、とくに積極的で死の直前まで献身した。県美術会結成以来の二十五年間、必要を説き具体化に参画し、ついに、昭和四十九年十月、一部

が公開されたが、全館完成を
と死の三日前まで東奔西走し、
明るい見通しのなかで、忽然
と久遠の旅に立った。

天光氏は晩年よく「ほほえ
みて、すべてを愛す 野の仏」
と色紙に書いたが、思えば、
あらゆる人を隣人とし、真・
善・美の持ち主には自分をさ
らけだし、人の輪を拡げてい
た。死後、従五位勲三等瑞宝
章が贈られた。

持ち込んだものの最初の計画
の中途であることに、どれ程
の心残りがあったことか、察
するに余りある心境を推察す
る今も、天光氏のお姿が浮ん
でならない。私は事務局長と
して常に行動できるだけのこ
とは勉めた積りであるが、天
光氏の行動にはついて行き切
れない感じさえする程に私の
年令を自覚したこともある。

最初美術館建設について友
納知事を訪問し引き続き、県
会議員の各政党を歴訪した。
全員の署名もお願いした等か
ら始った。それ以来、一万坪
の敷地と、十億の子算獲得の
為にも、県当局や関係者を日
参した。

彫刻家藤野天光県美術館協
議会議長は冬をきらった。き
らったその冬の十二月三十日、
市川市南八幡のアトリエで、
突如帰らぬ旅に立ったが、県
美術会は一月二十四日午後、
千葉市の県立美術館で会葬を
行なった。

天光氏は明治三十六年、群
馬県館林市朝日町で生まれ、
昭和六年の春、市川市に移住
した。本名を隆秋といい、は
じめ舜正と号したが、後に天
光と改めた。東京美術学校を
昭和三年に卒業以来、彫刻に
精魂をかたむけ、帝展、文展、
日展などに連続して大作を出
品し注目された。

こうして、昭和三十七年の
日展出品作の「ああ青春」は
文部大臣賞を受け、さらに、

昭和四十年の、日展出品作の
「光は大空より」は、芸術院
賞の対象になり、彫刻家とし
ての栄光を受け祝福された。

しかし、病魔は声帯摘出の
悲運に直面させたが、創作意
欲はますます燃え、日展や県
展などに相変わらず大作を出品
し、しかも、昭和四十八年に
は、若潮国体のミニユメント
を制作した。さらに、昭和四
十九年の秋には、日展に「イ
ンド彫刻のミトワナを想わせ
る健康な印象」の、若き男女
が抱擁する「和」を出品し、
前後して県展に青年像「天使」
を出品したのが、天光芸術公
開の最期になった。

とはいえ、生涯はさらに多
彩だった。死に至るまで力量
を発揮したのは、芸術文化団

希に見る行動家 浅見喜舟

(県立美術館協議会副議長)

何かの拍子でポツンと大木
の枝が折れたように、何が原
因だか、何の理由だか、それ
を知る由もなく、突然、美術
会長であり、理事長である天
光、藤野氏が他界せられた。

その知らせを受けて、「信じら
れない」という言葉が耳にさ
さやくだけだった。まさか、
四十九年の暮せまる日まで、
元気で、特に大橋前教育長を
訪問したのが二十八日であつ
たと聞く。三十日までは、少
しも変ることのない天光氏の
心も肉体も現世に輝いていた
筈であった。

氏を知る誰もが信じられな
い言葉を耳にしたことだろう。
しかし、これが神ならぬ身の
真実となつてしまったことは
青天の霹靂だった。

天光氏が二十余年間叫び続
けて来た美術館建設の夢は、
実現に拍車をかけ、四十九年
の県展を皮切りに祝賀会まで

特に教育棟には独創的
意欲を燃やし、常に自己の
主張と信念に対しては一步も
譲ることを知らなかった。天
光氏の実行力と信念には誰も
歯が立たなかった。希れに見
る火焰不動のような神通力の
持主だった。

文化会館に、また茂原高校
に残された男性像や、国体記念
の、輝く力の像が、今は亡き、
天光氏の芸術を永遠に伝えている。
美術館も、その一つかも知れ
ない。余りに多い業績は、神
が知るのみかも知れない。

もう一つの 「描かれた房総」展

会場に入ると、正面パネル

に横長の画面いっぱい巨大な魚をかついだ裸体の群像がまず目に入る。明治浪漫期の天才画家青木繁の名作「海の幸」である。海洋をバックに、漁師たちの生活のロマンが大胆な構図と巧みな色彩効果によって謳い上げられている。房総布良の海に取材したと言われるこの著名な作品は、「描かれた房総」の導入としてもつともふさわしい。

第一室に入る。壁面ほぼ中央に安井曾太郎の「外房風景」がある。倉敷の大原美術館の新館の中央を飾るこの大作を、いま、取材地房総の美術館の壁面に見ることは全く感動的である。この一作によって、外房^{太海}は写生地として脚光を浴びることになるのだが、ここには更に、内湾、外房、犬吠など「海」をモチーフとした作品が大小三〇点余展示され、第一セクションを構成

している。

続く第二セクションは「川と湖沼」をテーマに構成されている。小杉末醒の「水郷」は、牧歌的な水郷風景をバックに老漁夫が網を扱う図で、当時としては新鮮な画題であったと言われる。水郷を扱った洋画では最初のものとも言われていて、国立近代美術館の所蔵作品の中でも逸品である。竹内栖鳳「潮来小暑」速



水御舟「潮来所見」などは、正確には千葉県とは言いがたいが、水郷というイメージによってここに展示されることになったものである。日本画、水彩画の多いのもこのセクションの特徴

と言える。

最後の室は「山野・田園」をテーマとした第三セクションである。正面特設のパネルには、浅井忠の「春畝」を見ることが出来る。出身地佐倉の近在ならどこにでも見られる、農耕の情景を描いたもの

と思われる。一見しては平凡な田園風景だが、よく見れば、土の香り、鶯の声も聞えてくるような写実の鋭さがあり、今更ながら、この作家の天稟に感動させられる。鹿野山から九十九谷の日没を描いた東山魅夷の出世作「残照」は、この作家の自然探究と、制作

への没入の姿に厳肅さを感じさせる程である。この室に並ぶ多くの作品のモチーフは必ずしも景勝地ではない。それだけに、作品の発掘にも苦勞したが、「描かれた房総」の広がりを持たせる点で興味深いものがあつた。

三つのセクションにはその他に、高橋由一、小山正太郎、黒田清輝、藤島武二、石川寅治、中沢弘光、森田恒友、坂本繁二郎、石井柏亭、辻永、齊藤与里、青山熊治、林俊衛、椿貞雄、佐伯祐三、児島善三郎、小糸源太郎、青山義雄、曾宮一念、高島達四郎、野間

仁根、鈴木信太郎、石川滋彦、その他新進作家と県内在住作家合せて八〇余点の作品が展示され、一望しても、明治初期から現代までの作家を含んでいる。美術史的な流れから見れば、明治初期の洋画から明治美術会、白馬会を経て、

官展アカデミズムの確立までと、後期印象派の移入、フォービズ、キュービズム、抽象派、シュールリアリズムなど、ヨーロッパ芸術思潮の影響のもとに性急な歩みをした、日本の近代絵画史の一側面もとらえることができる。

——これは仮想の展覧会雑誌である——言い変えれば、私たちが本当は企画して見たかった特別展のイメージである。現実には、今催されている、「描かれた房総」は様々の事情（ここではそつとしか言ひようもないのだが）によって今のような展示構成になったのだが（展覧会目録参照）それでも実現までには困難も多く、館員ひとりひとりの情熱と、関係機関の協力や、所蔵者の理解がなかったら開催もむずかしかつたかも知れないのである。結果的には名作主義に陥らず、むしろその過程で

発掘した事実や、作品を多少なりとも展示構成に生かしていくことでユニークなものとなったと自負している。ぜひ多くの人々の御批判を受けたいものである。
(佐藤 清)

予 告

- 平常展「近代房総の美術家たち」
 - 三月一日—四月十五日
 - 第六回千葉市民美術展覧会
 - 三月九日—三月十六日
 - 第一回書星彌生書道展
 - 三月二十一日—三月三十日
 - 全日写連写真展
 - 三月二十三日—四月六日
 - 千葉彫刻展「歩」会
 - 四月十五日—四月二十七日
 - 書道芸術院南関東展覧会
 - 五月九日—五月十五日
 - 特別展「近代フランス名作版画展」
 - 六月十五日—七月五日
- 印象派から現代に至るまでの百年にわたり、マネ、ピサロ、ドガ、ルドン、ポナール、ゴーギャン、ロートレック、マチス、ピカソ、ブラック、シャガール、ルオーなど版画一一八点

収蔵作品紹介(2)

早春

若木山
(1912-1974)

本館所蔵の「早春」は、昭和四十四年の第五十四回日本美術院展に出品し奨励賞を受賞した作品である。

湖のほとりて来るべき春を待っているかのよう、群れ集うおしどりを高い視点からとらえているこの作品は、



「早春」

この作品が生れるためには、実はその以前に同じ年発表の「待春」(第二十四回院展「春期展」と題する三十号の作品と取り組んでの研究が下敷になっていた。若木は院展の春期展等に習作を出品し、それを秋の院展において大きな構成へ発展させるという努力をしばしば行なっている。「早春」以後、第五十五回院展「池

の春(奨励賞)、五十六回「夏の水(日本美術院賞)、五十七回「磯(奨励賞)」と連続受賞し、昭和四十八年の五十八回「海乙女」が院展最後の作品となった。この頃、自分の作品について「物事の本質だけを描きたいから、影やら遠近やらは必要ないんです。」(院賞の「夏の水」と語っている。この言葉は「早春」にも、そっくり当てはまっていると思う。若木とゴーギャンに、ある共通点を見ることが出来る。やがて印象主義に背を向け、絵は画家の精神の表出であり単なる外面描写ではないとして象徴主義を主張したゴーギャンが、浮世絵から学んだのも平面的画面構成による装飾的(象徴的)特色であった。作者の若木山は、日本美術院を主な舞台として活動した日本画家である。明治四十五年熊本市生まれ、長く山武郡土気町(現在千葉市)に画室を構えて数々の作品を発表した。また、千葉県美術会常任理事として活躍し本県美術文化の発展のために尽力されていたが、昭和四十九年の一月に六十一才でなくなった。若木はこの「早春」で院展特待にな



「波上海女図」



特別展「描かれた房総」に展示

に出品されている「波上海女図」(昭和二十八年・三十八回)はその頃の代表作品である。二艘の舟で大胆に三角形の構図をとり、全面には徹底した写真に満ち溢れている。また宗達・光琳派の研究のあとを想起させるような意匠も感じる。全面的に大胆で、神経質でそして体力と時間のこもった作品である。初期と晩期の作品を貫いている共通のものと、その後にはやがて悩み初める写真と自分独自の画風の創造との問題を内包していると思う。

特別展「描かれた房総」の開催中に故人の一周忌を迎えたことは偶然のことではあるが、画家としては、まだこれからという年令で世を去った若木の言葉でもって本文を結びたい。ある雑誌の質問「自分が一番考えていること」に対して答えたもの。

生きて行くことは、私にとつてはいとも簡単な事です。心の奥からつきあげてくるもの、その導きに従うことであり、心の要求を実生活と絵で満たして行く。それだけのことでです。

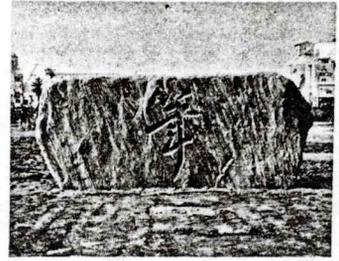
(米田 耕司)

筆塚建立される

名を刻んでいる。
四十九年十一月十七日除幕された碑は本館第五展示室東京湾側である。

的に建設された。碑は青石に筆太に「筆」と刻まれ、側石に筆塚建立の由来と三六七名の建設者氏

書は東洋の永い歴史の中で特有の伝統芸術として発展してきた。
書芸術をささげ発展させてきた文房四宝の中で筆の果してきた役割は偉大である。



(筆塚)

新収蔵資料

- 昭和四十九年八月二十日、日本芸術院会員津田信夫作、鴨、鳳翔薫炉、子迷家鴨、北辺夜猫子、驚、一点玲瓏の六点。
- 八月三十日、草土社同人、春陽会・国画会会員椿貞雄作、春夏秋冬四屏風、春の部)、黒壺に椿一輪、鋸山から見た房総半島、八重子像、自画像の五点。
- 九月二十日、明治美術会・関西美術院創立者浅井忠関係資料(日記、句集、書簡、黒沼槐山画等)一括。
- 十一月三十日、太平洋画会會員都島英喜作、洛北の早春一点。
- 十二月十二日、近代彫刻の先覚小倉惣次郎作、伊藤博文立像、明治天皇胸像の二点。
- なお次の作品が寄贈されたのでここにあつく御礼申し上げます。
- 八月三十日、友納武人氏より備前焼小花生一点。東珠樹氏より椿貞雄作、老政治家の像、渡辺義一君の像の二点。
- 十一月三十日、都島成一氏より都島英喜作、婦人像、八瀬の秋、巴里効外サンクルール男の顔の四点。
- 十二月十七日、都島成一氏

より浅井忠関係資料(短冊、黙語遺響の草稿、写真等)
○昭和五十年一月十八日、種谷扇舟氏より石井雙石作、印譜二点、
本館所蔵図書について
基本図書の中でコレクションになりつつあるものの中から一、二を紹介する。
黙語図案集 巻頭に中沢岩太が故浅井教授の図案と題し一文を掲げた本書は浅井忠の各種図案を木版彩色摺で紹介している。明治四十二年一月刊。
黙語日本画集 浅井忠の余技。剛健と洒落、豊艶の運筆を一本に集めた木版彩色摺の画集。明治四十二年七月刊。
黙語西洋画集 浅井忠の油彩、水彩を中心にスケッチ等を中沢岩太、鶴巻一、鹿子木孟郎、都島英喜等が編集したもので作品五十五点を紹介している。明治四十三年八月刊。
木魚遺響 浅井達三の浅井氏先代及亡兄忠伝に始まるこの本は浅井忠の渡歐日記、巴里日記、巴里寓居日記、浅井忠、和田柴桐共著の愚劣日記、浅井忠書簡等々を編纂したもので本文中に木版色摺で浅井忠自筆絵葉書六葉、モノクロで肖像等九十枚を採録している。明治四十二年九月刊。

日誌抄



(開館式)

- 49年10月—50年2月
- 十月
 - 二十三日。開館式行なわれる。参列者八〇〇名。
 - 二十四日。第二十六回県展始まる。展示総点数一、六二九点。
 - 十一月
 - 十七日。第二十六回県展終る。来館者一四、一九八名。筆塚除幕式行なわれる。
 - 二十一日。千葉県高等学校芸術祭美術・工芸・書道作品展始まる。九八三点展示。
 - 二十四日。千葉県高等学校芸術祭美術・工芸・書道作品展終る。来館者一、四六三名。
 - 二十八日。千葉県勤労者美術展始まる。一九八点展示。
 - 十二月
 - 一日。千葉県勤労者美術展終る。来館者一、一五四名。平常展「近代房総の美術家たち」始まる。五五点展示。
 - 二十五日。平常展「近代房総の美術家たち」終る。来館者一、二六二名。
 - 一月
 - 七日。第十九回子ども県展始まる。四、二四九点展示。
 - 十二日。第十九回子ども県展終る。来館者六、二八六名。
 - 十八日。開館記念特別展、「描かれた房総」始まる。八六点展示。
 - 二十二日。第二十一回千葉県書道協会展始まる。一七三一点展示。
 - 二月
 - 十六日。第二十一回千葉県書道協会展終る。来館者三、二九九名。



(視察中の友納知事)

寄贈図書

この欄では貴重な図書を御寄贈賜わった方々の御芳名を記し、お礼に代えさせていただきます。(敬称略)

- 千葉県郷土資料目録 千葉県立中央図書館
- 千葉県史・大正昭和編 千葉県史料・伊能忠敬書状
- 千葉県史料・伊能忠敬書状 千葉県企画部県民課
- 市川市史(5巻6冊) 市川市
- 市原の歩み 市原市
- 船橋市史(前篇・現代篇上) 船橋市
- 一宮町史 一宮町
- 鋸南町史 鋸南町教育委員会
- 館山市史 館山市
- 小見川町史 小見川町教育委員会
- 浦安町誌 浦安町
- 千葉県教育百年史第二巻 千葉県教育センター
- 成田市史(近世編史料集一及び四上) 成田市
- ちば市政だより縮刷版(23・4) 千葉市
- 白子町史 白子町
- 八街町史 八街町
- 新修成田山史 成田山新勝寺
- 栗源町史 栗源町
- 日本美術年鑑(昭和48年版)

東京国立文化財研究所
○我孫子古墳群
我孫子市教育委員会

○九十九里町誌資料集(一、五輯) 九十九里町
○東金史話 東金市
○千葉県農協20年史 千葉県農協中央会

○千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書 千葉県都市公社

○廣重武相名所旅絵日記(解説) 仁科又亮

○世界美術全集(本篇全36冊別巻14冊)

○国画(昭和18年11月号) 美術年鑑(昭和39年版ほか15冊) 竹尾 潮

○Guide to The Metropolitan Museum of Art. Annual Report 1972-1973 The Bulgalo Fine Art Academy Albright-Knox Art Gallery

○New York City public Sculpture by 19 th-Century American Artists 平野 馨

○成田史談(20号) 成田史談会
○千葉県指定有形文化財旧平野家住宅保存修理工事報告書 県教育庁文化課

○東京都美術館所蔵品集(1、II) 東京都美術館
○昭和48年度兵庫県立近代美術館報 兵庫県立近代美術館

○兵庫県立近代美術館
○昭和48年度東京芸術大学附属芸術資料館年報 東京芸術大学附属芸術資料館

○千葉市史(全3冊) 千葉市
○群馬県立近代美術館開館記念展

○戸方庵 井上コレクション
○ヘンリー・ムーアによるヘンリー・ムーア展 群馬県立美術館

○天象庵主人 浅見喜舟先生喜寿記念出版 編集委員会

○塩水流功(画集) 塩水流 功
○桜田精一自選展(画集) 桜田精一

○彫金工信田洋作品集 信田 洋

○書道芸術院20周年記念集
○美術名鑑(昭和50年版) 種谷扇舟

○千葉市大気汚染調査報告書 千葉市

○千葉市上ノ台遺跡 千葉市

○柏市鴻ノ巣遺跡 千葉市

○千奈川県立博物館年報(昭和48年度) 千奈川県立博物館
○生誕百年記念和田英作展 鹿兒島市立美術館
○奈良国立文化財研究所年報(一九三三) 奈良国立文化財研究所
○台湾の民具 埼玉県立博物館
○東北の美術 埼玉県立博物館

○桃山・江戸・明治300年の美術―御物と重文を中心とする日本美術の精髓― 上野の森美術館

○交通博物館概要(昭和49年度) 交通博物館

○船橋市郷土資料館第9回展示資料観覧の手びき(浮世絵展―江戸時代から明治初期の風俗―) 船橋市郷土資料館

○文学のなかの房総展 千葉県立上総博物館

○古墳時代の茨城 茨城県歴史館

○沖繩県立博物館々々報No.7 沖繩県立博物館

○仙台市博物館収蔵資料目録(VI) 仙台市博物館

○埼玉県立博物館年報(昭和48年) 埼玉県立博物館

○曾宮一念展 明治の石版画展

○河井寛治郎陶芸展 浜松市美術館

○和歌山県立美術館のあゆみ 和歌山県立美術館
○北海道立美術館所蔵作品目録 北海道立美術館
○第7回北海道秀作美術館展 北海道立美術館
○栃木県立美術館紀要・年報 No.111 栃木県立美術館
○昭和48年度兵庫県立美術館年報 兵庫県立美術館

○所蔵品目録 北九州市立八幡美術館
○日本の風景―北斎と広重― 神奈川県立博物館

○初期南画の展開 奈良県立美術館
○広島県立美術館要覧 広島県立美術館

○日本洋画の原点と開花 兵庫県立近代美術館

○大久保一丘展 浜松市美術館
○芸術学研究1 東京教育大学芸術学研究会

○昔の旅 埼玉県立博物館
○美術博物館ニュース113 東京大学教養学部

○美術館だより第一〇七号・一〇八号 和歌山県立近代美術館

○埼玉県立博物館だより8号 埼玉県立博物館

○画壇是非 石井柏亭著
○柏亭自傳 石井柏亭著

○彫金家年表 小野禮子
○新潟県美術博物館報 新潟県美術博物館

○成田市の文化財(第五輯) 成田市教育委員会

○松戸市金桶台遺跡 千葉県都市公社
○日本芸術院史 藤川正司
○一場会図録(五冊)山谷録
○昭和49年度市町村文化財保護行政基本調査 県教育庁文化課